議員視察研修報告

委員長　髙畑雅一

私たち川根本町議会議員14名は、8月7日から9日の3日間を掛けて岩手県へ研修にでむきました。視察研修の目的は現在川根本町で検討されている「木質エネルギー循環モデル事業」を考えていく上で、先進地岩手県の取り組みを見て肌で感じ取ること。トップランナーであるが故に新たな課題に直面する機会も多いと思われ、そこで得た知見は今後の木質バイオマスエネルギー発展に大いに参考になると思われます。岩手県葛巻町・紫波町を訪れることにより今後の本町の木質バイオマス事業の参考にしたい。また、深刻な過疎化により生徒数が減る状況のなか、県立川根高等学校に導入されて5年目になる「連携型中高一貫教育」この同じような悩みを持つ岩手県立軽米高等学校がどう立ち向かっているのか肌で感じるのがこの研修の目的であった。

新町の将来像を「水と森の番人が創る癒しの郷」と設定し、大井川の清流美しい山々や森林などを守り続け、本町のみならず他地域の人々の生活をも支え、この地域に住む人、訪れる人、だれもが快適で安心して過ごすことのできる「癒しの郷」を創ることを目標とし、本町が推進しようとしている「木質バイオマスエネルギー開発」事業。間伐材・製材所端材等を利用した木質バイオマスエネルギーシステムの構築、導入を促進し、森林整備と原料供給業務による雇用の推進をはかることを計画設定の趣旨ととらえ、議員それぞれ研修に取り組んだ。

長野県の「木質バイオマスエネルギー」推進事業は県指導のもとに農林水産部、環境生活部だけでなく、多くの関係部局がいろいろな観点から利用促進に取り組んでいる。また、ペレットボイラー・ストーブの開発には「民間企業と岩手県工業技術センターの協力で進められており、いろいろな立場の人々が自発的に参加する組織「岩手木質バイオマス研究会」の参画により、産・学・官の協議が適切に機能していることが岩手県の取り組みの特徴になっている。先進地である岩手県においても「木質ペレット」は製材工場・チップ工場からの安価な木質材料を使うということで成り立っている。製材用から大量の木質材を安定的に入手できれば良いが、製品生産の状況により安定確保ができないようであれば、安価な原材料で製造することが前提となっている木質ペレットは姿を消すであろう。そうなると、未利用の間伐材また土場雑材を求めていくことになろうが、今度は集材コストが問題となる。原材料が高ければ安い木質ペレットが提供できなくなるであろう。大井川の清流を取り戻し、美しい山々や森林などを、これからも守り続けていく「循環モデル事業」ならば、第一に町内の森林資材を有効活用することによって森林を保安し育てて行く、そしてそのことが林業の再生に結びついていく。そこで生まれてくる未使用材の間伐材等によっての「木質バイオマス循環モデル事業」ならいいとなによりもこの事業が、林業に携わっている人々の元気の源になって行くものでなければならないと感じた。

最終日は連携型中高一貫教育をほぼ同じ年度に導入した岩手県立軽米高等学校を訪れた。学校を取り巻く環境が私たち川根本町と似ており、自然豊かな町である。年々少子化により生徒が少なくなるなか、「軽米地区中高一貫教育協議会」・「地区支援者協議会」・「実務担当者会議」が中心になり特色のある教育指導をしている。高校入学者選考方法では、国語・数学・英語の基礎学力確認のための軽米高校独自の入試テストを行い、各種の資格取得可能コース・専門学校、短期大学、国公立大学進学コースを設け指導し、特に国公立大学入学者数20名以上を目標に学習指導を行っている。このように学力ばかりではなく、スポーツ面でも同様に力を入れている。その教育方針を地域の人達が理解し、中学・高校・地域住民が同一教育目標を持ち行動していることを感じた。岩手県立軽米高等学校の「中高一貫教育」は、全てにおいて地域と一体となった工夫がされており、独自の教育方針を持ち、自己の発見と夢を実現するため高校の先生方も努力をされている。地域が子供を育て、地域が学校を育てて行く時が来たのではないだろうか。そんな思いを残し研修を終えた。